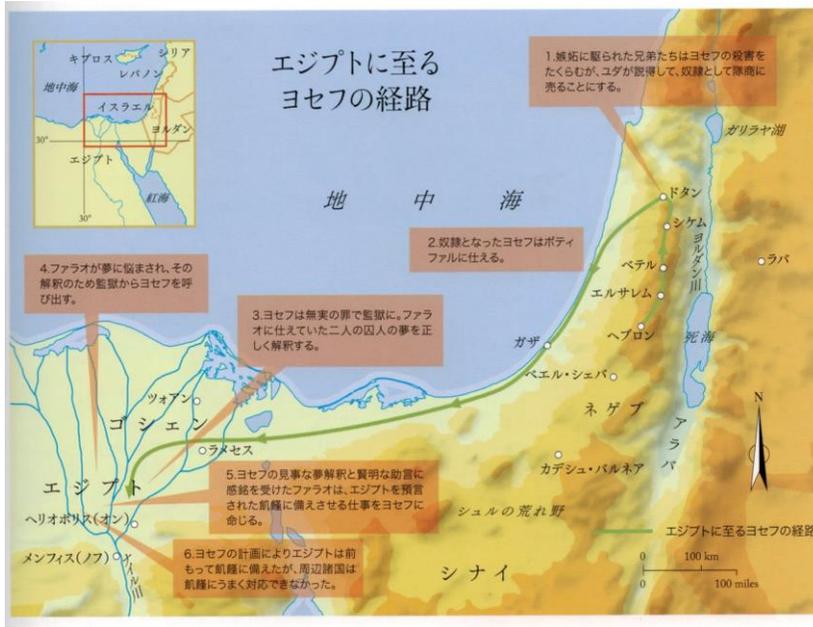


ヨセフはドタンで兄たちに売られ、遠くエジプトの地に來ました。

1. 忠実に働き (1～3 節)



①ポティファルに (1)「**ヨセフがエジプトへ連れて行かれたとき、パロの廷臣で侍従長のポティファルというひとりのエジプト人が、ヨセフをそこに連れて下って来たイシュマエル人の手からヨセフを買取った。**」37章からの続きです。ヨセフは兄弟達に銀20枚で売られ、奴隷としてエジプトに連れて行かれました。彼を買ったのは、エジプト王(パロ)の廷臣(宦官とも訳せる)で侍従長であったポティファルという人でした。彼はイシュマエル人の隊商からヨセフを買取ったのです。長い距離をつながれて、エジプトまでの道を歩かされたことでしょうか、落ち着き先が決まるということにもなりました。

②幸運な人と (2)「**主がヨセフとともにおられたので、彼は幸運な人となり、そのエジプト人の家におられた。**」「主がヨセフとともにおられた」という事は、兄弟や親に伝えた夢を見させられた時に、すでに始まっていた出来事としては、異国に來させられ、まことに不運のようにも見えるのですが、どこにあっても主なる神は、ヨセフとともにあったのです。それゆえに、ヨセフはむしろ「幸運な人」、主に恵まれた人として、ポティファルの下で働いたのです。

③すべてを成功させ (3)「**彼の主人は、主が彼とともにおられ、主が彼のすることをすべて成功させてくださるのを見た。**」ヨセフの主人には、ヨセフの信じる神のことはよくわからなかったでしょう。しかし、彼には特別についてくれている存在がいらっしゃるということを感じたのでしょうか。なにしろ、ヨセフは託された仕事や生活を見事にこなしたのです。それは彼の後ろにいて下さる神が彼を守り導いてくださっていると、外からも見えたのです。

2. 主人に信頼され (4～6 節)

①その家を管理させ (4)「**それでヨセフは主人にことのほか愛され、主人は彼を側近の者とし、その家を管理させ、彼の全財産をヨセフの手にゆだねた。**」そんなことから、ポティファルはヨセフをことのほか愛したのです。かつて、父イスラエルがヨセフを特別に愛しましたが、エジプトの地での主人からも愛されました。そして、主人は彼を側近者として、管理の役割を与えました。家の財産を任せられるという大きな責任まで与えられたのです。奴隷として、やってきたヨセフが、これほどの信頼と役割を与えられたという事は、人間の思いや計画を越えていたといえるでしょう。

②(5)「**主人が彼に、その家と全財産とを管理させたときから、主はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を、祝福された。それで主の祝福が、家や野にある、全財産の上にあった。**」祝福されたのはヨセフだ



けではなく、ポティファルの家や財産すべての上に、あったのです。ヨセフが与えられた職務がうまく運ぶことの結果として、家全体の働きが豊かになっていったのです。

- ③見目麗しい (6)「彼はヨセフの手に全財産をゆだね、自分の食べる食物以外には、何も気を使わなかった。しかもヨセフは体格も良く、美男子であった。」ポティファルは全財産をヨセフにまかせ、食べることに以外に気を使うことはなかったのです。ヨセフは仕事ができるだけでなく、姿形が美しく、見栄えも良かったのです。誰からも好感をもたれる要素を持っていました。側近としては申し分ありませんでした。

3. 誘惑とヨセフの対応 (7~10 節)

- ①ポティファルの妻の誘惑 (7~8)「これらのことの後、主人の妻はヨセフに目をつけて、『私と寝ておくれ』と言った。しかし、彼は拒んで主人の妻に言った。『ご覧ください。私の主人は、家の中のことは何でも、私に任せ、気を使わず、全財産を私の手にゆだねられました。』ヨセフは魅力的な若者でした。外見的にはハンサム、内面的にも豊かで、仕事も精力的にそつなくこなすとなれば、いわゆるもてる男の典型でありました。若い女性たちの中にも心惹かれる人もいたでしょう。ところが、彼に目をとめた人に、ポティファルの妻がいたのです。彼女は直接的な誘いを始めたのです。なんと「私と寝ておくれ」というのです。しかし、ヨセフは即座に断ります。「私の主人は、私を信頼して家のことについては何であれ、任せてくださっています。財産管理についてまで、私にさせておられるのです。」
- ②拒否する理由 (9)「ご主人は、この家の中では私より大きな権威を振るおうとはされず、あなた以外には、何も私に差し止めてはおられません。あなたがご主人の奥様だからです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができますでしょうか。」「ご主人は仕事の指示についてすら、私に任せ、余計な口出しをなさいません。」「しかし、奥様。口には出さなくても、差し止めておられることがあります。それは奥様に対して不適切なことをすることです。今、どうしてそんな悪事ができますでしょうか。それはまた、私の神に対する罪でもあるのですから」。このようにきっぱりと断ったのです。お見事です。聖い心がヨセフに授けられていたのです。
- ③聞き入れず (10)「それでも彼女は毎日、ヨセフに言い寄ったが、彼は聞き入れず、彼女のそばに寝ることも、彼女といっしょにいることもしなかった。」ところが、彼女は懲りることなく、毎日のように、ヨセフに言い寄ったのです。主人の妻である私の言うことが聞けないの！といった様子です。しかし、ヨセフは彼女に近づくこともしようせず、もちろん、疑われるような行動をしないように気を付けたのです。青年クリスチャンの鑑(かがみ)のようなヨセフです。

《結論》今朝の聖書箇所をみて、ある方は、「どうして 38 章を飛ばすのですか」と思われたかもしれません。ヨセフの兄弟ユダの上におきた出来事が記された、ある面では重要な章ではありますが、今回はヨセフの生涯というテーマでありますので、あえて 39 章に突入させていただきました。

さて、兄たちに売られてエジプトに来て、ポティファルに買われたヨセフ。彼は自分を売った兄達への恨みや怒りに心を燃やすことよりも、前に向かって進み、積極的に生きることが優先されていました。主を信じて、目の前において与えられた仕事を懸命にこなしたのです。彼のなすことは、なんであれ上手くいき、ヨセフには彼の神がついていてくださるということを感じさせるものがあったのです。だからこそ、主人のポティファルも彼を信頼して取り立て、責任ある仕事につけさせたのです。ヨセフには「俺には、他の奴とは違って、神がついているのだ。」といった慢心なところがありません。うまくいっても、威張るような様子もありません。

しかし、「好事魔多し」というのでしょうか。万事につけて高得点のヨセフでしたが、こともあろうに主人の妻からの誘惑の手が伸びてきたのです。とはいえ、ヨセフには主への信仰がありました。詩篇 119 篇 9 節に「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるのでしょうか。あなたのみことばに従ってそれを守ることです」とありますが、彼のうちには聖なる神さまの促しがあったのでしょうか。誘惑をきっぱりと退けています。「NO!」と言う勇氣が彼にはあったのです。人間的になれば、奥様の言う事を無下に退けるのは失礼になるのではとってしまうかもしれません。ところが、彼は申し出をきっぱりと断ったのです。

それでは何が、彼をしてそのようにさせたのでしょうか。それは、彼の主への信仰と関係していました。9 節にそれがあらわれています。「どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができますでしょうか。」とヨセフは言っています。つまり、その申し出を受け入れることは、すなわち神に対して罪を犯すことであるという明確な理解があったのです。主人ポティファルに対する罪はもちろんですが、根本的には神に対する不義なのだととらえていたのです。

イエス・キリストが「放蕩息子のたとえ話」をされました。放蕩後に父親の所に戻ったときに、彼はこのように謝ったのです。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」(ルカ 15:21)。つまり、父親に対してなした罪は、神に対する罪に基づいていることを、キリストは暗に教えてくださっているのです。

ヨセフは生ける神を絶えず意識していたのでしょうか。それゆえに、突然と訪れた誘惑に対しても、適切に対応できました。私たちが生きる現場においても、様々なかたちをとった誘惑が生じます。ある時は、お金、ある時は名誉心、ある時は性的誘惑、ある時はプライドをくすぐる誘惑

等。

その時に、生ける神を意識し、御言葉によって対処が与えられますように。主イエスご自身がそうされた（マタイ 4 章）のですから。